

上映者たちの言葉

2020年12月16日
「全国コミュニティシネマ会議2020」
プレゼンテーション

2 | シネマテーク、自主上映など



兵庫県映画センター | 上映会の様子

兵庫県映画センター(兵庫県) | 柘田浩平

2020年の兵庫県映画センターは非常に厳しい状態でした

映画センターは、都道府県単位で、あるいはもう少し小さいエリアで活動している上映団体で、全国各地にあります。その形態は様々で、個人から株式会社まで、ひとつひとつが基本的には独立した団体ですが、映画を愛する人たちが、同じ志を持って全国で地域に根ざした活動をしています。皆様の町でも学校や公民館、地域のホールなど映画館以外のスクリーンで映画を見る機会があると思います。そういった上映会を非劇場上映というのですが、その非劇場上映会を仕掛けているのが、各地で活動する映画センターです。よりよい映画を作りたいと努力している映画人たちを支え、協力関係を築きながら日本の映像文化のレベルアップに寄与したいと考え、直接・間接にお手伝いをすることもあります。映画を映すだけでなく、フィルムや機材の貸し出し、上映会の企画段階からのご相談を受けたり、直接企画を立てて上映会をすることもあります。また、映画に関連する様々なお問い合わせにもできる限りお答えできるように努めています。

もうひとつ、映画で過疎をつくらぬという思いもあります。兵庫県は特に顕著ですが、映画館が都市部に集中していて、映画館がない地域が多くあります。映画館自体が近隣にない地域にも映画をスクリーンで届けたい、優れた映画を自分たちの手で上映していきたいという思いをもとに、かれこれ40年以上活動を続けていて、いまも全国各地で30以上の映画センターが活動しています。学校や行政、地域の映画サークルと連動し、ときには地域の皆さんと協力して上映会を開催しています。

2020年の兵庫県映画センターは非常に厳しい状態となっています。我々は自由に上映できる劇場をもっていません。地域のホールや学校などを使って上映しています。仕事の大半は主催者からの依頼によるもので、自分たちが主催する上映、興行は多くありません。コロナ禍による影響は2月後半から出始めて、その後、緊急事態宣言が出たことによって、公共の施設は休館になり、学校も含めて上映会は軒並み中止、または延期になりました。施設の休館が大体6月頃まで続き、7月には再開し始めましたが、客席を50%しか使えず、加えて消毒液や検温器、アクリル製のパーテーション設置などの感染症対策にも追われました。主催者側も今後どうなるかわからない、催しの計画が全く立てられないので、話は来ても流れてしまうケースがほとんどでした。

我々は基本的にやる、やらないを決められない場合がほとんどなので厳しいのです。自分たちで主催して上映を行うこともありますが、メインの客層が高齢者ということもあって観客が思うように集まらず、赤字になっている状況です。数字上は8-12月で7割まで戻りましたが、6月頃に延期になった催しを再実施したものを含めての数字で、なかなか新規の仕事が入らず、11月頃からまたキャンセルが増え始めて安定しません。このような状況なので、いま、何か新しいことをやることは難しい状況です。ただ、室内の上映ができないということで、野外上映、ドライブインシアターの問い合わせが多く、夏には他県の映画センターと協力して開催しました。今後はオンライン上映会なども実施できるようになればと考えております。

	ブック数	売上
1月	141%	155%
2月	86%	97%
3月	3%	3%
4月	8%	2%
5月	0%	1%
6月	4%	5%
7月	17%	12%
8月	39%	42%
9月	73%	55%
10月	50%	32%
11月	71%	71%
12月	73%	64%
合計	45%	37%

松本CINEMAセレクト(長野県松本市) | 宮崎善文

映画館以外でも映画を待っているお客様がいて、映画を届ける人がいることを、忘れないでほしい

70年代後半から映画を観客に届ける活動をしています。年間200日ぐらい、映画館のレイトショーの枠で自主上映してきました。ずっとひとりで行っていましたが、2000年代の初め、15スクリーンもあった松本市のまちなかの映画館がゼロになってしまったときに、いろいろ考えました。そして、映画館という場所を持つという選択ではなく、公共施設を借りて映画上映を続ける選択をし、NPO法人松本CINEMAセレクト(以下、シネマセレクト)をつくりました。まだ、35ミリ映写機で上映する時代でした。シネマセレクトは、現在も全員ボランティアで運営しています。地方の自主上映というと、月に一回ぐらい、楽しく上映会を実施しているというイメージを持たれるかもしれませんが、私たちは、まつもと市民芸術館をメイン会場に、公共施設を借りて、年間100作品くらい、毎週末のように上映会を行っています。上映会にはゲストをよぶことも少なくありません。また、毎年、松本市美術館と共催で子ども映画教室もやっています。これだけやっていますが、スタッフは完全にボランティアで、映画を見るときは他のお客様同様、料金を払って座席に座ります。もちろん私もそうしています。参加は毎回自由で、誰も集まらなくて、私がひとりで行く回もあります。

4月には松本市の公共施設がコロナで休館となりました。公共施設は1ヶ月後には再開しましたが、シネマセレクトの上映会はすぐ再開できるわけもなく、何とか6月17日に再開しました。活動休止中の約2ヶ月間に上映が中止になった作品は約40作品、回収した数万枚のチラシは軽トラックに積んで紙の再生業者に持っていきました。

ある決められた時間に多種多様な人が集まり、暗闇の中でスクリーンを見つめる映画館、映画を上映している場所で映画を見るという行為がいかにかけがえのない大切なものなのか、それを失ったことの意味を、改めてみんなで考えようと、6月の上映再開のときには、映画の中で映画館の尊さを描いた場面のある『女と男のいる舗道』、『ようこそ、革命シネマへ』、『ミツバチのささやき』、『100人の子供たちが列車を待っている』、『ラストムービー』を中心にプログラムを組みました。現在は、また以前のペースに戻り、多くのゲストを招いて上映会を開催しています。

コロナ感染対策として、無人の野菜販売場みたいに受付に飛沫防止パネルを立てて、チケットを置いて、お客様自身に取ってもらい、自身でもぎってもらうようにしています。また、入場時にお名前やお電話番号等を記入してもらっていますが、これは、3週間後に私が責任を持って消却しています。

シネマセレクトは自主上映団体ですが、私が過去に映画館にいたこともあり、上映回数も多いので、多くの配給会社と良好な関係を築くことができています。私たちの上映が止まったとき、配給会社東風の「仮説の映画館」プロジェクトの方が心配して声をかけてくれました。公共施設を使って上映している私たちを、映画館と同じように「仮説の映画館」の仲間に入れてくれました。「宮崎さんのところは東風にとって映画館と同じだから」と誘ってくれたときには本当に嬉しかったです。映画館という場を保有しているわけではないので、ミニシアター・エド基金の対象にはならず、仕方がないと思う一方で、ちょっと割り切れないような、寂しい気持ちにもなりました。このあたりのことは「映画芸術」472号に書かせていただきましたので、読んでいただければと思います。こんなこと書いて大丈夫かとみんなに言われましたが(笑)。

シネマセレクトは「武士は食わねど高橋枝」的なところもあって、寄付を求めたり、クラウドファンディングを求めたりはしなかったのですが、お客様が会員更新のときに寄付を送ってくださったことはありました。あるご夫婦は「私たちは、シネマセレクトで出会って結婚子どもを授かったから」と、国から支給された1人10万円の給付金、5人家族だから50万円を寄付したいと申し出てくれました。嬉しいけど、1週間考えてください、子どもさんの分は残してくださいとお伝えしましたが、そのまま50万円振り込んで下さいました。こういう自主的なご寄付で6月末までに90万円をお預かりしました。

ある世代までは、映画との出会いは学校の体育館や講堂で強制的に見せられた映画だったりします。映画



上から

『ゆきゆきて、神軍』オンライントーク
『アルプススタンドのはしの方』トーク(11月20日)
宮崎大祐監督、廣田朋奈さん(11月15日)
古厩智之監督(9月6日)

館も大変ですが、映画センターや移動上映業者さんも、ほとんどの事業がキャンセルになったりして大変な苦勞をされています。目立たない仕事なので、なかなか助けてもらえません。

シネマセレクトはなりわいとして映画を上映しているわけではなく、私自身の、映画のそばにいたいという欲求にボランティアを巻き込み、勝手に時間とお金を貢いで上映を続けているようなところもありますが、それでも、僕たちの上映を待っていてくれる人がいます。映画館以外でも映画を待っているお客様がいて、そこに映画を届ける映画人がいることを、忘れないでほしいと思います。

川崎市市民ミュージアム(神奈川県川崎市) | 中西香南子

令和元年東日本台風(台風19号)による浸水被害状況一次報告

新型コロナの影響とは異なることになり恐縮ですが、2019年の令和元年東日本台風(台風19号)で当館がどのような被害を受け、それにどのように対処し、現在に至るのか、映画分野のレスキュー活動に焦点をあて、この場をお借りして簡単にご報告させていただきます。

川崎市市民ミュージアムは、「都市と人間」を基本テーマとした博物館と美術館の複合文化施設で、考古、歴史、民俗、美術文芸、グラフィック、写真、漫画、映画、映像、9分野の作品・資料を収集してきました。映画分野としては、独立プロダクション製作の映画作品や当時未公開であった海外の作品などを中心とした映画フィルムとノンフィルム(ポスター、脚本、セットデザイン画などを含む紙資料)を収集、1階には35mm、16mm、DLPの映写機を完備した270席の映像ホールがあり、定期的上映会を開催していました。

被災状況についての全体的な詳細は、川崎市発行「令和元年東日本台風から1年——川崎市市民ミュージアム 被災収蔵品レスキュー活動の記録」(2020年12月7日)の報告をご参照いただければと思います。浸水の原因としては、内水氾濫であり、2019年10月12日19時30分頃、駐車場から地下階に水が侵入したと考えられています。総計約26万点に及ぶ収蔵品のうち、展示や貸し出し中のものを除く約23万点は、建物の地下にある9室の収蔵庫に収められていましたが、床上2メートルを越す浸水のためその大半が水損しました。また、地下にあった機械設備などもすべて水没しました。



上から

—
浸水の様子

タケノコ状に膨張・変形したフィルム

映画フィルムは第9収蔵庫で保管していました。当館では様々な収蔵品を所蔵していますが、その中でも写真作品と映画フィルムが最も水の影響に弱いものであることから、先行して搬出する方針が決まりました。国立映画アーカイブや国内の専門機関、専門家のご支援の下、10月19日にはサンプルを搬出し、22日には、被災後、ミュージアムとして初めての大規模な搬出を行いました。搬出先のラボやポストプロダクション会社では、応急処置として水洗機などの機械を用いて、洗浄・乾燥処置を行っています。

映画フィルムは、長い間水に浸かると乳剤が溶け、画や音などの情報が失われてしまいます。残った乳剤にはカビや細菌が発生する可能性もあります。また、水に浸かり続けることで乳剤が膨張し、棚板を破壊するほど、タケノコ状に変形してしまいます。フィルムを取り出して、搬出するためには、たんぱく質が腐ったような異臭の中、棚板を解体したり、床板をはがしたりしなければなりません。また、大量に発生したカビの対応などを含む安全確認、応急処置にまつわる様々な調整など、課題が山積みでした。2020年4月に、収蔵庫内のすべてのフィルムの移動は完了しました。優先順位を検討しながら、今後は修復としてのデジタル化を検討していく予定です。

映画分野のノンフィルム(紙資料など)は第3, 7, 8収蔵庫に保管されており、本格的なレスキュー活動が開始されたのは、美術部門全体のレスキュー活動が本格化した2019年11月14日です。ノンフィルムのレスキュー活動に関しても国立映画アーカイブに大変心強いお力添えをいただいたことに加え、文化財保存支援機構(JCP)などの修復家のご助言をうけながら、一部は安定化として剥離・乾燥・燻蒸を行い、その他

は一時安定化として冷凍保管をしています。こちらも優先順位を検討しながら、本格的な修復を修復家に依頼し、行っていく予定です。

被災直後から続いた応急処置までのレスキュー活動は、限られた環境の中での時間との闘いでした。とにかく物量がものすごいうえに、様々な制約があり、作業者の人数が限られているため、肉体的にも精神的にも疲労度の高い作業でした。

簡易的な説明になってしまいましたが、その他の詳細は、川崎市ホームページや川崎市市民ミュージアム公式サイトからもご確認いただけます。今後映像を用いたさらに詳細な報告も順次公開予定です。(2020年12月24日に映像ドキュメンタリー「川崎市市民ミュージアム 被災収蔵品レスキューの映像記録—2019.10.12」(40分)を公開しました。) 今後も様々なレスキュー活動報告を公開していく予定です。

最後に、当館のレスキュー活動にお力添えをいただいた国立映画アーカイブ、アーキビスト、専門機関の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。加えて、コミュニティシネマセンターやその他の方々から温かいお声かけをいただいたことで、ここまで進んでくれたと感じております。新型コロナの影響と違う話になりましたが、ひとつ共通していると感じるのは、緊急時におけるネットワークの重要性です。もう二度とこのようなことが起きないことを祈りつつ、当館の事例が今後の防災に役立つよう、これからも情報共有・発信ができればと願っております。

アテネ・フランセ文化センター(東京・御茶ノ水) | 松本正道

手間暇をかけて1本の映画を大切に、ぜいたくな体験を共有する場として
映画の上映を続けていきたいと思えます

皆さんのご報告を聞いてすごく勉強になりました。皆さんがそれぞれのコミュニティの中で、ひとつひとつ丁寧な問題を解決していて、専門性がすごく高くなっているなという気がしました。90年代半ばに全国コミュニティシネマ会議(映画上映ネットワーク会議)が始まった頃は、どちらかという、きょう会場にいらしている名古屋シネマテークの倉本徹さんやシネマの田井肇さんたちと、理念的なことばかり論争していた気がしますが、それが、現在は何か具体的な問題として、理念的なものも次々に具現化されている印象を皆さんのお話から受けました。

最初に、残念な悲しいお話からさせていただきます。かつてスイス大使館の文化担当官をつとめられた、写真家のジャン=フランソワ・ゲリーさんが先週の土曜日に亡くなりました。ゲリーさんは、映画事業に熱心に取り組んでくださり、ゲリーさんがスイス大使館にいらしたので、ダニエル・シュミット、フレディ・ムラー、それにアラン・タネールといったスイスの巨匠たちの映画が広く公開されたと思います。この場を借りましてゲリーさんにお礼を申し上げたいと思います。ゲリーさんのことを思いながら、皆さんのお話を聞いていて、映画に熱心な人がその場所にいるというだけで、映画の環境が全く変わってくるんだということを改めて感じました。アテネ・フランセ文化センターでは、緊急事態宣言が発出された後、上映は休んでいましたが7月から徐々に再開しています。アテネの場合、上映は、ランニングコストを入れると必ず赤字になるので上映をしないほど経営状態がよくなるのですが、それでも上映を続けています。うちのスタッフも、困ったものだと思います。7月から12月までの半年間の上映日数は50日程度でした。コロナ対策をとりながら粛々と上映を続けているという状態です。先ほど、映画館は(コロナ禍で換気を強いているので)寒いというお話がありましたが、アテネ・フランセ文化センターのホールもかなり寒いんですね。先日、いつも通る道にあるお店で携帯カイロを安売りしていたので、それを買って「必要な人にお渡します」と、そういう対策をとりました。何でもできることからやっということうことです。

毎年夏に開催している「中原昌也への白紙委任状」という上映会は今年も行いました。この企画は、毎回

満席になります。今年は50%しか入れることができないので、例年1回の上映だったものを昼夜2回上映という形でやりました。ところが、初日にいらした中原さんがすごい咳をしていらしたので、嫌がる中原さんを別室に隔離して、いきなりオンライントークに変更し、次の日からはご自宅からご出演いただくことになりました。ご自宅の書斎で横たわって、左手で何かのぬいぐるみを撫でながら、ブタか犬か覚えてないですが、しゃべっている中原さんの姿は観客にすぐうけていました(笑)。

もうひとつ、10年以上、いやもう20年近く上映したいと思っていたマノエル・オリヴェイラ監督の『緞子の靴』の上映を、東京フィルメックスとの共催企画として実現できたということを挙げるすることができます。この作品の上映交渉では、アンスティチュ・フランセ東京の坂本安美さんにご尽力いただき、35ミリ版の日本語字幕付上映を実現しました。コミュニティシネマセンターがかかわってきた映画作家たち、ワイズマンもそうですけれども、その中にマノエル・オリヴェイラ監督がいて、『緞子の靴』は、そのオリヴェイラの代表作でもあります。それと同時に、この企画は、コミュニティシネマセンターのFシネマ・プロジェクト、つまりフィルムで映画を上映する環境を保持していこうという、そのプロジェクトの一環でもかと思っています。

コロナの時代に6時間50分という超長編作品を上映するのはいかがなものか、ということも言われたのですが、『死霊魂』(ワン・ビン監督)は8時間じゃないかと反論して、この状況でも映画事業を続けていきたい、コロナの時代であっても、主催者とお客さんという立場を越えて、皆で協力して映画を上映できる環境を保持していきましようと呼びかけていくことを考えています。『緞子の靴』は、有楽町朝日ホールという定員700人のホールと、定員130人のアテネ・フランセ文化センターの2つのホールで上映しました。長時間の作品を異なる大きさの2つの会場でやるときの感染症対策をどう考えるかを切り口に、コロナ時代の新たな上映のあり方を考える企画として文化庁からもご支援をいただくことができました。

感染防止対策で最も有効だったのは、東京フィルメックスが採用していたヤフーのオンラインチケットサービス「PassMarket(パスマーケット)」を利用したことです。オンラインチケットなので観客と主催者、あるいは観客同士の接触機会を減らすことができ、万が一クラスターが発生した場合にも、非常に正確な連絡先等の情報を保持することができます。ただ、当日券の販売がなかったので、ネット環境が整っていない方にとっては非常に厳しく、こういった方々に関しては、アテネでの上映に限定して、事前に書留で現金を送っていただきチケットを購入していただくということもやりました。それでも、近くに郵便局がないので現金を送ることができない、けれどどうしても見たいという年配の方がいらして、とうとう、アテネのスタッフが自分でチケットを購入してお譲りするということまでありました。私は、その方がいらっしゃるかとも不安だったのですが、上映当日、堂々とマスクをせずにいらしゃいました(笑)。もちろんマスクをお渡しして入場していただきましたが。

配信などが出てきて、映画を見る方法も多様化しています。その中で、映画館で映画を見ることは、ぜいたくな鑑賞方法なんだということも、改めて自覚しました。アテネは極めて地味な形ですが、コミュニティシネマの皆さんと協力しながら、とりあえず一本一本を、手間をかけて上映していくこと、それを大切にしていきたい。もしかしたら京都の料理人のようなものかもしれませんが、手間暇をかけて1本の映画を大切に、ぜいたくな体験を共有する場として映画の上映を続けていきたいと思っています。

最後にもうひとつ付け加えると、『緞子の靴』は1985年の作品ですけれども、フランスの文化省のバックアップがあって完成した作品だと言われています。そのときのフランスの文化大臣は、社会党政権時代ですが、ジャック・ラングという人でした。ジャック・ラングは、前にもお話ししたことがありますけれども、フランス語圏の高校生たちすべてにアラン・レネの『夜と霧』を見せること、見た後に先生と学生が映画について話し合うことを推奨した人物です。文化大臣が、映画について、このようなことを言う。現実にはフランスもいろいろと混乱していることもあるかもしれませんが、このお話だけ聞くとフランスが文化的にすごく進んでいるという気がいたします。つまり、コミュニティシネマの問題ひとつひとつは、先ほど申し上げたように、それぞれの上映団体を構成している人たちが解決していくものであると同時に、国家とかあるいは世界で解決していく問題でもあるという認識を、もう一度ここで皆さんと共有して、私のお話は終わりたいと思います。

